

## 事業完了報告書

### 調査研究期間等

調査研究期間	委託を受けた日 ～ 令和8年3月15日
調査研究事項	<p>《委託研究：夜間中学における教育活動充実に係る調査研究》</p> <p>I. 教育課程、教育環境整備に関すること</p> <p>③中学校教育を実施するに必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方</p> <p>④ICTを活用した生徒の学習活動の支援の在り方</p>
調査研究のねらい	<p>令和8年3月時点で、岸城中学校の在籍予定生徒数122名のうち、94%が外国籍の生徒となり、本市夜間学級での日本語指導へのニーズが年々高まってきている。背景には、日本に仕事を求める外国人が増加するに伴い、本市または近隣市に在住する外国人の割合が増加していることが挙げられる。本市は近隣の空港からのアクセスもよく（急行列車や特急列車の停車駅となっている）、利便性が高いことや、同郷出身の外国人同士の生活の場、働く場、学習の場の重なりからコミュニティスペースが本市もしくは近隣に根付いており、結果的に夜間学級における外国人の在籍者が占める割合も増加しているものと分析している。また、これまでは日本語での指示や指導を補う際に、第2言語として英語を習得している生徒の割合が高かったため、英語での補助的な指示や指導を行えていたが、少しずつ英語圏ではない生徒の増加（16か国の生徒）により、一斉での指示や指導内容が伝わらず、より一人ひとりのニーズに応じたきめ細かい指導の必要性が高まっている。また、今後、多文化共生社会の形成のため互いに置かれた立場を考え、地域社会の中で理解し合い、認め合って生活していくことが求められる中、生徒の中には、日本語をはじめ、生活や文化のちがいにより、日常生活を過ごすことに不安を感じている生徒もおり、日々教員が生徒の生活面のサポートも担っている状況である。また生徒の中には、家庭や就労の状況により登校意欲はあるものの登校できない生徒もおり、生徒一人ひとりの学習保障も課題となっている。学習保障をするにあたり、家庭や職場など場所や時間を選ばず、学習するためのツールとしてICT機器をつかったオンライン授業やオンデマンド授業などの学習環境を再整備することも必要である。</p> <p>本事業を活用することにより、学習環境を整え、生徒やその家族が日本での生活を安心して送ることができるよう、生徒一人ひとりの日本語能力と生活スキル獲得のための学びの場をつくり、また、就労しながら学習を続けている生徒の努力や夜間学級の現状等を地域社会に改めて広く周知し、生徒のエンパワメントに繋がる取り組みを推進したい。</p> <p>① 「生きる日本語・学習（日常生活で活用できる日本語や学習）」をテーマに、学</p>

	<p>んだことが日常生活の中で使えるスキルとなるよう、各教科や日本語指導に関連付けた指導を行う。また、年間の行事を体験活動につなげることで、学習したことを実践的に活用できるよう計画的に取り組んでいく。学習の最後にはふりかえりを行い、学んだ内容が、活動や交流で活かすことができたのかを生徒自身のアンケートをもとに分析し、次時以降の学習の改善に繋げていく。</p> <p>② 国籍・年齢・学習経験等により日本語能力や習熟度にちがいがあある生徒が在籍している現状を踏まえ、4月と9月に、日本語能力や習熟度を測るアンケートを行い、生徒一人ひとりの習熟状況を把握した上で、日常生活に必要な場面(病院、買い物、市役所、公共交通機関など)でのやり取りを想定し、生活言語の習得に向けて、各教科の課題を設定する。</p> <p>③ ICT機器を活用し、動画や画像などの具体物を用いた教材を積極的に活用することで、生徒の理解を深めていく。</p> <p>④ 生徒一人ひとりの学習を充実させるために、一人一台学習者用端末を配布し、タイピングの練習、ロイロノートの使い方など、年間通じて計画的に指導を行っていく。ICTツールを活用することにより、成果物(生徒の文字や考え)をすぐに確認できることや指導者からすぐに生徒に対しフィードバックすることでより効率的に学びが深まるよう工夫する。また、各授業の振り返りを端末上で行うことで、生徒一人ひとりの理解度をすぐに確認し分析することで次時以降の学習改善に繋げていく。</p> <p>⑤ 日本語指導やICT活用など、教員の専門性をさらに高めるため、講師を招いての研修(年4回)や教員間での検討会(月1回)を計画する。また、研究推進担当を中心に、ICTを活用した授業づくりをテーマとして、校内研究を進めていく。</p> <p>⑥ 家庭や就労の状況に関わらず、全ての生徒への学習機会を保障するため、端末を使ったオンライン授業やオンデマンド授業づくり、端末での課題の提示や提出方法などを研究し、学習機会の充実に繋げていく。</p> <p>⑦ 学校からの連絡や行事の報告などをすべての生徒が知ることができるように、ホームページの活用、充実を進める。</p>
<p>調査研究の成果</p>	<p>今年度は、9月の入学生24名を含めた122名が在籍している。生徒の94%が外国人であり、渡日歴が浅く日本語がほとんど理解できていない生徒も多い。また、外国人生徒の増加に伴い、多国籍化も進んでおり、一斉での指示や指導内容が伝わらないことで、今まで以上に個に応じたきめ細かい指導が必要であると実感している。</p> <p>そこで、個に応じたきめ細かな指導やどの生徒にとっても分かりやすい授業づくりを実現するため、これまでの教科書やノート、プリントなどの紙媒体を用いた指導方法を見直し、生徒一人ひとりに配付されているタブレット端末等のICT機器を活用していくことが上記の課題を解決する一助になるのではと考え、以下の観点をもとに指導の充実と調査研究を実践した。</p> <p>○個別最適な指導を行える体制づくり</p>

・今年度から、日本語能力に応じて、5つの能力別コースを設定し、国語の時間にコース別で学習を行えるよう指導体制を整備した。

・新入学生には、入学時に日本語能力の確認を含めた面談を行い、在校生には、前年度の習熟状況をアンケートや成果物等で確認し、コース分けを行った。授業では複数の教員が、生徒一人ひとりの教育的ニーズを把握しながら指導できるよう、指導体制を整備した。

#### ○ICT機器を活用する学習活動の工夫

・これまで活用してきた「みんなの日本語」や「いっぽ にほんご さんぽ」「まるごと日本のことばと文化」に加えて「いろどり」などの音声を含むデジタル教材の活用を行った。

・拡大した文字や絵・イラストによって視覚的に伝わりやすくなるようデジタル教材を作成し、モニターに提示することで、生徒にとって授業内容が理解できるよう工夫を行った。

・ロイロノートを活用し、生徒のタブレットに問題を送り、生徒の回答をその場でモニターを通して全員で共有する等の学習を取り入れたことで、生徒の習熟状況をすぐに把握し、効果的な指導につなげることができた。

・AIドリルを活用し、自分の習熟度に合わせた学習を取り入れたことで、生徒自身が習熟度を確認でき、また理解できたことで自信をもって学習を進めることができるようになった。文字の書き順について、生徒自らに気づきがあり、主体的に学ぶことができるようになった。

・必要に応じて、翻訳ソフトを活用し、母語による支援を行いながら習熟度が高まるよう指導方法を工夫した。

・家庭の事情により、登校が困難な生徒に向けて、オンライン授業を計10回行った。生徒からは、「どうしても通えない日があり、困っていたが、オンラインで授業を受けることができてありがたかった。」と肯定的な反応があった。

#### ○学習指導の充実

・「生きる日本語・学習（日常生活で活用できる日本語や学習）」をテーマに、全校で学習指導を進めた。日常生活で、生徒が経験するであろう場面（駅、お店、病院、公共交通機関など）を具体的に想定し、必要なスキルを獲得できるよう、各教科の内容に組み込んで学習を行った。また、校外学習については、学習内容を活かすための重要な機会と位置付け、学んだ内容が活かせるよう計画的に学習を進めてきた。

・今年度は、日本語指導を含む学習指導の際に、アウトプット（特に話すこと）や生徒間での交流に重点を置いた学習を行ってきた。国語（日本語）の時間には、1分間スピーチや他の生徒に質問する時間を取り入れ、生徒の語彙や会話能力の向上とともに生徒同士の結びつきを深める機会を定期的に設けてきた。その結果、授業内外において、生徒間で日本語で思いを伝えようとする場面が増えたり、伝わりにくい場面では他の生徒が補ったりする場面が増えた。

・授業中には、生徒の語彙力、聞き取り力などの習熟度を定期的に確認し、授業後には、ふりかえりをノートやタブレットを通じて行い、学習内容の成果を生徒と教員双方が確認しながら学習を進めた。学びの成果を可視化できたことで、生徒の自信や学習への意欲づけにつながり、より前向きに学習に取り組むことができた。

・教室や廊下の掲示物、毎日の生徒指導通信、毎月の保健だよりを通じて、その時

期にあった内容を掲示・発信することで、日本の文化や風習、四季の変化を感じることができるよう工夫を行った。取組みを行うことで、関連する日本語の習得だけでなく、日本の文化や互いの文化について考える機会につながった。

・また、日本の各地域の気候と暮らしについて、自然現象やその土地での暮らしの知恵や方法を学び、防災について考える機会を設けた。今年度の校外学習（琵琶湖バレイ）では、日本海側の気候と暮らしを社会科等で学び、実際に、雪が降る地域に行くことで、学習した内容を体験し、暮らしの知恵や防寒対策について考えることができた。校外学習のふりかえりでは、撮影した写真をもとに、タブレットに学習した内容をまとめ、交流する時間を設けた。校外学習に向けて各教科等の学習に関連づけて、計画的に積み重ねてきたことで、学習への意欲・関心を高めることにもつながっている。

・日本語レベルや習熟度に関係なく、どの生徒にとっても理解できるよう、積極的に視覚教材や具体物を用いた。また、より生徒たちの興味関心が高まるように生徒の状況に応じて作成した教材を作成したり、視覚的な効果を高めるため、カラー刷りのプリントを使用したりするなど教材教具の工夫を行った。具体物で実際に操作したり、視覚教材を用いたりすることで、「イメージがしやすく学習が分かりやすかった。」「（学習した場面で）実際に話してみたい。」など肯定的な回答が多数あった。

#### ○校内連携による指導の充実

・研究部主催の研究委員会を毎月実施し、生徒の状況把握と指導内容の共有に努めた。

- ① 生徒一人ひとりの国語(日本語)の指導状況や習熟度の確認
- ② 学習内容の習熟度に応じた指導計画の変更
- ③ 使用教材の共有

教員間で、定期的に確認と共有を行えたことで、指導の方向性を揃え、教員にとっても、安心な体制づくりにつなげることができた。

・日本語指導支援員（府）と教員が、生徒の学習状況を頻繁に共有しながら、時に指導方法を助言したり、ともに教材づくりを行ったりすることで、全体の指導力向上を図ることができた。

・進学を希望する生徒（本年度は5名）に対して、適切な進路選択ができるよう教員間で連携して進路指導を行った。

- ① 進路指導主事を中心に、生徒一人ひとりと懇談を実施。（年10回）
- ② 受験する生徒向けに、生徒の状況に応じた教材の作製。
- ③ 課業前の個別指導の実施。
- ④ 教員間で役割分担し、オープンスクールや学校見学に同行。

教員間で、連携した指導ができたことで、生徒自身が自己の習熟度（日本語状況を含む）に応じて、様々な選択肢を考えながら将来に向けて進路選択をすることができた。

・毎月1回、生徒指導部による情報交換の場を開き、生徒の出席状況、家庭や就労の状況等の把握と共有に努めた。共有された情報をもとに、生徒への配慮や声かけを職員全体で確認できたことで、生徒の心理的安全性の担保につながった。

#### ○教職員研修の充実と指導力向上

・校内研修として、教員間で日々授業に役立つ教材や指導法（日本語指導を含む）

について、指導力向上のために日々高め合う機会を設けた。

・4月7日（月）

日本語指導の経験をもつ本校職員が講師として、「全学級で指導するための基礎的環境整備としての日本語指導」について具体例を交えて研修を行った。日本語レベルに関係なくどのコースや学級でも取り組める内容が、職員間で共有できたことで、校内で統一した指導体制の構築につながった。

・6月19日（木）

ICT支援員（本市任用）と本校教員を講師とし、ロイロノートに関する研修を行った。

- ① ロイロノートの使い方
- ② 授業における活用例
- ③ ふりかえりアンケートの作成や回答方法 など

全ての教員が授業で活用できるよう、教員間で確認しながら進めたことで、授業の振り返りや理解度のチェックをタブレット端末で確認したり、教員間で共有することで、次時からの授業づくりに効果的に活用できるようになった。

・7月15日（火）

ICT支援員（本市任用）を講師とし、キャンバの使い方に関する研修を行った。

- ① キャンバを使った教材づくり
- ② ポートフォリオ（新聞など）としてのキャンバの活用方法

・8月25日（月）

日本語教育支援グループことのは副理事 安田乙世氏を講師として招き『チーム岸城・みんなで考える新しい日本語指導の在り方』をテーマに研修を実施した。夜間学級の生徒に焦点を当て、「生徒にとって獲得すべき日本語とは何か。」「教材づくりのポイント」などについて、夜間学級の実態に即した助言があったことで、教員の授業力や意欲の向上につなげることができた。

・9月18日（木）

岸和田市教育委員会主催の「ちがいを楽しみながら、子どもといっしょに考える多文化共生の営み——外国にルーツのある子どもたちとともに学び、創る、わたしたちの マインドセット——」をテーマとした人権教育研修に本校教員2名が参加した。学齢期における日本語指導が必要な児童生徒数の増加、それに伴う課題、などを共有し、多文化共生教育を進めるためのポイントや必要性を再確認することができた。

・10月28日（火）

外部講師を招き、夜間学級の生徒が使える「eライブラリ」の使い方と活用について研修を行った。研修後、AIドリルの活用について教員間で確認し、操作方法について生徒に指導を行った。ドリルを活用したことで、生徒自身が学習したい内容を、自分のペースで進められるようになったり、書き順を繰り返し確認できるようになったことで、生徒の学力向上につながっている。また、生徒の状況に合わせた教材づくり（プリント作成も含む）にも活用している。

・12月5日（金）、6日（土）

第71回全国夜間中学校研究大会（東大阪大会）に9名の教員が参加した（不参加の教員1名にも資料を配付）。本市夜間学級での実践を発表し、また他市の夜間学級の実践と成果を聞き、校内での更なる指導力向上に活かす機会を得ることができた。いずれの研修も、参加した職員から全教員へと共有し、校内全体の日本語指導・ICT

を活用した授業の指導力の向上につなげることができた。

#### ○学校行事等の充実

・各学校行事の前には、教員から事前指導をする際に、やさしい日本語を使って丁寧伝え、その後に生徒同士が交流やグループ活動を通してポスターづくりなどに取り組む機会を設定した。それにより、生徒同士が母語ではなく、簡単な日本語でのコミュニケーションでやりとりする姿が見られるようになった。また、生徒同士のつながりが深まったことで、意欲的な行事への参加につながった。

・5月18日（日）

近畿夜間中学校新入生歓迎会（堺市産業振興センター）へ参加後、春の校外学習（大阪市立科学館）を実施した。事前に、見学先に関する学習を行い、必要な日本語の確認や公共交通機関の乗り方、（科学館職員への）質問の仕方などを理科や国語（日本語）の学習に、関連づけて指導を行った。また、事後にはタブレットを使って、学習したことを新聞にまとめ、校内で共有した。

・6月23日（月）

校内ミニ運動会を実施。生徒会が中心となって、司会、進行など役割を分担したり、生徒全員が参加しやすい競技やルールづくりを考え、説明方法について考えたりしながら意欲的に取り組むことができた。どの生徒にとっても分かりやすい説明について、生徒たちが積極的に意見を出し合うことで、やさしい日本語や英語、ジェスチャーや具体物など、様々なアイデアを出し合い、全員で楽しむことができる運動会につなげることができた。

・6月29日（日）

校外学習として大阪・関西万博を見学した。事前学習として、学習班ごとにタブレットを使い、パビリオンや各国に関する調べ学習を行った。当日の行程について班ごとに、パンフレットに掲載されている地図をもとに日本語を使って交流する時間を設けて、当日の計画を班ごとに行った。また、全体では、見学先で想定される会話（店での買い物や食事、目的地への道の尋ね方など）を、教科に関連づけながら学習を行った。事後には、タブレットを使って、新聞としてまとめる活動を行った。

・8月5日（火）

平和登校日を実施。当日に人権学習（平和教育）を行い、その後、生徒会が主体となり「平和の集い」を行った。集会では、生徒全員が、平和への思いを込めた1分間スピーチを行い、事前に生徒一人ひとりが作成したキャンドルに火をともし、参加した生徒・教員全員で平和を願って黙とうをした。

・10月3日（金）

校内運動会を実施。紅白に分かれて対戦した。選手宣誓では、事前に、宣誓で伝える言葉を、学習した言葉を使って生徒たちで考えた。開・閉会式の司会進行は生徒会が中心となり、進行台本や競技の順番、競技の説明方法などを考え、進行した。

・10月26日（日）

近夜中連合運動会に参加。事前に、競技種目の練習を、日本語を用いてグループでコミュニケーションをとりながら交流する場を設定し、練習に取り組んだ。当日は、練習の効果もあり、競技内外で、生徒間でコミュニケーションをとっている時間が増えただけでなく、他校の生徒とも意欲的に交流することができた。

・11月24日（月）

近夜中主催の天王寺動物園へのフィールドワークに参加。事前に日本語での動物の

名前を確認したり、園内のマップを使って施設の名前や歴史について調べ学習を行ったりした。当日は、同伴している教員と看板に書かれている説明文を読み、書かれている内容を、日本語をつかってグループ間で交流しながら活動した。後日、タブレットを使って、学習したことを新聞でまとめた。

・12月2日（火）

料理集会を実施。生徒と教員がグループに分かれ、生徒自身の母国の料理を作って交流した。母国の料理を披露するための話し合いや必要な材料の買い出しを生徒が行い、買い物をする際の日本語でのやり取りを事前に学習し、活動につなげた。また、料理の説明を日本語で行い、互いの国の食文化に触れる場となった。食事中は、生徒間で互いの料理について、日本語で質問したり、答えたりする場面もあり、学んだ日本語を、意欲的に活用する生徒が多く見られるようになった。

・1月25日（日）

冬の校外学習（琵琶湖バレイ）を実施。事前に校外学習先の情報（気候や土地や文化など）を、インターネットを介しての調べ学習を行い、タブレットつかって新聞にまとめ、新聞をもとに日本語でプレゼンテーションを行い、生徒全員で共有した。また、活動中に体験するであろう場面を想定し、日本語を使った質問や、インストラクターへの記念写真の撮影依頼、ご当地のお土産などの買い物など、その場面に必要な会話の仕方や必要な言葉、スキルやマナーを、各教科に関連づけて学習した。当日は、グループ間で、日本語をつかって交流しながら体験活動を実施し、学んだ内容を意欲的にアウトプットすることができた。また、想定していた以上の寒さを体験したことから、事後学習として、冬季の暮らし方や防寒対策についてふりかえる時間を設けた。

・2月8日（日）

近畿夜間中学校連合作品展に参加。今年度は、共同作品のテーマを生徒たちからの発案をもとに「岸和田の魅力発見」とし、作品づくりに向けて岸和田の良さについて、生徒たちが日本語をつかってコミュニケーションをとりながら考える場を設定し、今年度は、岸和田城のレプリカを制作した。岸和田城を再現するために、グループに分かれて、画像や写真をもとに必要な材料を準備し、制作に臨んだ。活動中は、日本語や母語を交えながら交流している場面が多く見られた。

・3月4日（水）

卒業生（今年度は7名）を送る会として「お別れ会」を開催。音楽の授業で取り組んだ各コースの合奏やダンス、有志による母国の歌やダンスの発表を通して、それぞれの文化を相互に理解する場となった。また、最後には、日本語を使って卒業生自身の思いを語り、これまでの学習の成果や取り組みを互いに振り返る機会をつくった。

#### ○冊子の作成と活用

・1年間の学習のまとめとして、文集「希望」第48号を作成生徒自身の目標や希望、日々の思いなどを日本語で表現することにより、これまでの学習成果の確認と振り返りにつなげることができた。

・2月4日（水）に「希望を語る会」を実施した。冊子「希望」の作文をもとに全体の前で、日本語でのスピーチを行った。今年度は、スピーチ後に日本語での生徒間での質疑応答を行い、学習の成果を一人ひとりがふりかえることができた。また、

<p>生徒たちが語り合うことで尊重し合える集団づくりにつなげることができた。</p> <p>○公開授業等による夜間学級の周知</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・7月15(火) 地元ラジオ 岸和田ラジオで「(本市)夜間学級」の話題を取り上げ、市民に向けて周知を行った。</li><li>・10月9日(木) 貝塚市人権教育研究会(多文化共生部会)が、研修の一環として本校夜間学級を見学。貝塚市の小中学校教員10名が参加。</li><li>・10月27日(月)、28日(火) オープンスクールを設定し、本市教育委員会及び市内小中学校の教職員に案内。16名(24日)12名(25日)が参加。</li><li>・2月9日(月)～15日(日) 市役所内ロビーにおいて、生徒が制作した作品を展示。夜間学級の紹介ポスターも掲示し、周知に努めた。</li></ul> <p>以上のような活動を通じて、市民の方々に生徒たちが、学びに向かう前向きな姿や夜間学級という場が、意欲を持って学ぼうとする人たちの希望の場であることを伝える広報活動の一環としても有意義であった。</p>
---